

「ヒロインの名前」

田辺聖子

さきに私は、主人公の名には平凡な名をつける、と書いた。

平三とか平太とか、三平とか、三太郎とか……。

しかしこれは、私の作品群では、(数少ないが、私の作品をかなり全般的に読んで下さっている方々があつて、そういう人たちが分類されるのに)

「中年もの」

の中に入る作品の場合である。

これらは、なるべく無名性を強調するのに、わかりやすいのがよい。平凡なほどよい。

しかし恋愛小説はちがう。恋愛小説では名前もすでに作品の一部である。

昔見たアメリカ映画の、題はわすれたのにヒロインの名前だけおぼえているのがある。あれは青春恋愛映画であつたが、たしか、

「マージョリイ・モーニングスター」

というのだったとおぼえている。いかにも清新な美少女を思わせるではないか。

つまり、恋愛映画(小説も同じ)にあつては、その名前からしてすでにドラマがはじまっているといわねばならない。

以前私は、時代小説の中の、実在した主人公の名は変えられないが、架空のヒロインの名はどのようなもつけられる、この女性名前のつけかたに「作者の文学的センスと蓄積が光るのであり」それも小説のたのしみどころの一つである、という風なことを書いたが、たとえば吉川英治さんの『宮本武蔵』では、お通や朱実というのが出てくる。お通というのはいかにも貞淑

それで、純情そうで、武蔵にすがって、

「つ、妻じゃとひとこと、いうて下さいませ……」

なんていいそうだし、朱美というのはいかにもフラッパーな感じである。お杉ばば、というのも頑固者でくらすぬ婆さんの感じをよく出している。女の名前に作者の文学的センスが光るというのはそのをいう。

「いや、女性の名前はむつかしい……」

と現代小説の男性作家がいわれていた。その人は、奥さんの出身女子高の卒業生名簿を見て考えたり、されるそうである。

実は私も出身校の同窓会名簿をもっているが、私の場合は、これがあんまり利用できない。ちよつとひねった名前にしたときはいろいろ考えないといけない。名簿を見ていると時代の嗜好、というのがあって、これがかなり流行性をもっている。私の出身校も古いから大正時代の女性の名には「ハツ」「ヤス」「コウ」「千代」なんてあり、昭和に入ると「昭子」「和子」がぐつと多くなり、昭和十五年の紀元二千六百年奉祝行事が大々的に行なわれた年には「紀子」「元子」なんか多かったり、する。終戦後はいっぺんにバタくさくなったり芸名じみたりし、「マリ」なんてのも多い。

そういう流れを見つつ、ストーリーや性格にふさわしい名を考え出さないといけないので、これはたのしくはあるものの、中々むつかしい。

私には、「乃里子シリーズ」という長篇連作があつて『言い寄る』『私的生活』『母をつぶしながら』はみな、乃里子というヒロインである。放送タレントの小山乃里子さんはかねがね、

「ワタシの名アとったんやろ!?!」

といっているが、これは偶然である。小説の乃里子より現実の「ノコちゃん」のほうが、ずつと活発でたのしい性格である。小説の乃里子はすこしかげひなたある女である。『窓を開けま

すか？』は亜希子、『愛の幻滅』は眉子、『猫も杓子も』は阿佐子——ちよつと何か共通して
るかしら？

もしかりに、主人公の名前が気に入らないまま、時間に逐われて書き出したとなると、これ
はもう、私の場合、悲惨である。心づもりしている筋へ、なかなか追いこめない。

ヒロインの名前がきまる、というのが第一段階である。

そしてこういうときは必ず、連載第一回目であるから、編集者もイライラしている。第一
回目を見れば、だいたいどういう傾向の小説かわかるし、ベテラン編集者ならまだその上に、
読者の気持をどの程度つかめるか、その雑誌にとってどれほど寄与できるか、パツとわかると
ころがあるにちがいない。だから、連載第一回目の原稿というのは、作者だけではない。編集
者も緊張して待っている。

それに、私の小説はたいてい挿絵つきである。それも女性ファッション誌の連載小説という
ことになる、カラーの挿絵になる。これはかなり時間がかかる。挿絵の先生のところへ早め
に原稿をとどけなくては、向うも都合があるわけである。

女主人公の年齢、性格、職業（この頃は、ヒロインの職業が主要テーマの一つになった。専
業主婦も小説にならないではないのだが——）がわからなければ、挿絵の先生の想像力も発動
しないであろう。

そんなわけで、皆がいまかいまか、と第一回目の原稿をまちあぐねているのに、私がなか
か出さない、編集者はじれじれして電話をかけてくる。

「半分でもできていないでしょうか。半分でも頂きたいのですが」

半分もなにも、ヒロインの名がきまらぬ限り、一枚だって書けない。話が進捗しんちよくしないのであ
る。編集者はそのへんの状況の理解にくるしむようである。

「きまらないのは名前だけですな？」

「そう、そう。あらすじはできてます」

「ではその名前のところだけあけておいて書きはじめて頂く、というわけにいきませんか？全部できたところにもし思いつかれたら、空白の箇所へあとから書きこめばいいわけですから——いや、書きこむぐらいはこちらでやりますから、あとで電話でお知らせ頂ければ——」

これがそういう具合にいかないのだ。

つまりここに、私のものする「恋愛小説」の秘密がある。気に入った名前の女主人公であればこそ、筆が「すーいすい」と運び、人々はうごきはじめるのである。空白にしておくというのは、まだヒロインの顔ができてないことだから、顔のない主人公に、なんで私が愛情をもてよう？

たとえば、まだ名を思いつかぬまま、かりに「お杉」を使うとする。(これは「おすぎとピコ」のおすぎではなく、『宮本武蔵』のお杉ばばからの連想である)

「——お杉はウェイターに合図してカンパリソーダを頼んだ。都心の夕暮れには、ほろにがいカンパリがよく適う」

などという出だし、ここまでは、やっと書いても、何しろヒロインが「お杉」では、このあとニツチもサツチもいかないのである。ここはやはり、「ルルはカンパリソーダを飲んでいる。屈託のある心に、ほろにがいカンパリがほどよく沁みる——」などというのでないと、サマにならないのである。

ルルというのは『返事はあした』で使った。「留々」という名の女の子である。こういう名前は性格をえらぶ。これでやっと小説は動き出すという寸法である。男の主人公が、平太であるうが平三であろうが、どっちでもよいのとは、えらい違いである。

名は体をあらわす、というが、その効果を正反対につかう場合もある。

「斉坂すみれ」

という名を使ったのは『愛してよろしいですか?』と『風をください』であった。(よけいなことであるが私の作品はまだ一篇も外国語に翻訳されたことがない。翻訳家にいわせると、「大阪弁がどなりまへん」ということだった。その人はフランス語専門であったが、しかし、別のところで題だけ英語に訳されたことがある。この『愛してよろしいですか?』は

“IS IT ALRIGHT TO LOVE YOU?”

であった)

すみれ、という名を聞くといかにも、あえかな、デリケートな美少女を想像するであろう。ところが、このヒロインは長身でいかつく骨っぽくて、男みたい、ということにした。ハイミスの、仕事のできる女で、だから自信ある態度と口調をもっている。

そういう女が、たまたま「すみれ」などという名をもっているところが、この女の弱みである。男に、

「名前は何ていうの」

と聞かれて、

「すみれ」

と答えるのが、彼女はわれながら恥ずかしいのである。自分でも、自分に似合わないと思ってるので、一瞬、口ごもり、小さい声になってしまう。というのは、「すみれ」と聞いたとたん、
男たちは、

「プッ」

と吹き出すのを、一再ならず経験しているからである。

ところが、一人、

「かわいらしい名前やね」

といってくれた男がいて、その男とすみれサンは恋仲になるのである。つまり彼は、ホカの男のように、女の見かけだけで判断しないで、中身を洞察する力と感性のある男なのであった。すみれサンが、内心は柔らかい、やさしい、女っぽい心の持ち主なのを見ぬき、それがいかにも「すみれ」という名にふさわしい、と判断したのである。

こういう洞察力のある男はめったにいない。たいていの男はいつも忙しがっており、じっくり、とことん、女の本質を見きわめるゆとりなんか、あろうはずはなく、みな手軽に、うわべだけで判断し、俗なる通念に従った評価しかできない。だから、若くて美女っぽい女にだけ目がいき、ハイミスでいかつい女には、スーと視線がそれてしまうのである。

それ故ニッポンの男は、カス女をつかむ公算が大きい。ざまアみる。

右の弊害をとりのぞくにはどうしたらいいか。男が女の内実を洞察し、その女の真の価値をみとめ、また女のほうも、男のよさがわかる。というのは、これはどういう関係にしたらよからうか。

私は男を、社会にまだ出していない大学生にした。

学生はたいてい、ヒマがある。(社会に出て会社勤めした男の子や女の子は、口を揃えているではないか——社会人が、こない忙しいとは思いませんでした、と。学生の頃、やたらヒマをもてあましていた証拠である) ヒマがあると、異性の内実について研究する時間もたっぷりあるだろう。

また、俗なる通念に毒されていない部分も多いだろう。(学生のうちから俗っぽいのも大勢いるが)——そういう男なら、ロマンスの芽生えない現代日本において、恋人たる資格を獲得する光栄に飾られる。

かくて、ベテランのキャリアウーマンでハイミスのすみれサンの恋人は大学生となった。

『ベッドの思惑』という小説のヒロインは、「和田あかり」という名であった。

私はこれが少し、気に入っている。

これもハイミスである。

いったい、なんでハイミスばかり私が書くかというところ、若い娘では小説にならないのである。「結婚したら家庭に入ります。カレも、そう望んでますし。ハイ、エプロンつけて、毎日、カレを『おかえりなさい』と出迎えてあげるんです」というような娘では、小説が発展展開しないのである。そうですか、結構ですね、で終わってしまう。

エプロンをつけて迎えたくとも、相手がおらぬというような、家にも入りたいが、会社にも居坐りたいというような、あるいはまた、あの男が本命ではあるが、こっちのほうもいい、あつちはスベリ止めに確保しよう、いろいろもくろんでいたのに、片端から振られてしまった、というような、そういう女でないと小説にならない。

サー、どうするかという、のつびきならぬところに立たされ、前もうしろも断崖絶壁、という女なればこそ、小説になる。

そこまでくるころには、女は、ハイミスになつてゐるわけである。トシがすこし締まらなないと、考えも締まらない。

しかし私は、小説にならないからといって、若い娘たちの、

「結婚したがかり症候群」

をおとしめるものではない。若い娘たちがあけても暮れても、結婚のことであたまがいつばいで、それよりほかのことは考えられず、芝生にブランコのある家や、ツルばらを這わせたアーチや、赤白チェックのテーブルクロスや、自分の手編みのセーターを着せた夫、(着た、ではない。女から見れば、着せてるわけである) 男の子・女の子ひとりずつの子供たち——そんなものを夢にも思い描く、それを唾^{つよ}うわけではない。

私は将来の風潮として、ほとんどの主婦が社会的に働く場をもつようになるのではないかと

思うが、だからといって、「結婚したがりの精神とそれは背馳はいちするとは考えていない。

女の子が結婚したがるのは、春になって花がひらき、つぼみがふくらむように自然なことである。神サマはそのタネを、女の子のごく小さいうちから埋めこんでいられるので、女の子がすくすくと大きくなるにしたい、タネも養分を得て芽を出し、育ってくる。

だから妙齢になって結婚したがるといえるのは、自然の大きな摂理によるのであろう。

ハイミスはそこあたりで花を咲かしそなった、ということが出来る。

どこかで手ちがいがあった。

その手ちがいのドラマというのに、見るべきものが多々ある。

私はそれを小説にするのが好きなのである。

かつ、手ちがいによりまごついている姿に、いうにいえぬ女らしさ、女本来のもてる本性があらわれる。これに反し、自然のままに花を咲かせ、実を結んだ女たちには、「女本来の本性」はあまり出ない。ニッポンの女は（男もそうだが）結婚すると、女よりも家刀いえとじ自になってしまいう人が多い。これは主婦よりごつい権力者のことである。（男の家父長かふちやうはいまやすたれつつあるのに、それに代わって、家刀自はふえた）家刀自よりは女の方が小説になるのである。

私が、ハイミスヒロインにすえたがるゆえんである。——ハイミスの名前から話がそれてしまった。

あかり、という名は希望があつて向日性に富み、進取の氣象も感じられる。（歌手の人に、そんな名があつたが）『ベッドの思惑』のヒロインは、落ちこんでも、わりに何やかや、自分でやってみてスランプを脱出する。

かつ、口も達者な女、という設定にした。

いったい、私自身がそうだから痛感するのだが、日本人は口少ない人が多い。

中におしやべりの人もいるが、これは文字通り、饒舌なだけであつて、ミのあることはしや

べっていない。雄弁能弁と、多弁饒舌はちがう。

中身のあることをしゃべっていたら、いくら長広舌をふるっても、おしゃべりとは思えない。はじめから終わりまで、じーっと耳傾けたくなるであろう。

日本人は以心伝心とか、表情や愛想笑いや動作、ボディランゲージなどというもので、会話の一部分を成してしまうクセがあるようだ。とことん論争し、至らぬくまなく言葉で意思を伝達し合う伝統はない。たまに、外国もののテレビドラマなんか見ていると、登場人物はここを先途と見解をのべたり反駁したり、立証したり、弁解したりするのに忙しい。

ことに女性が立板に水のごとく、理路整然と、もう反駁の余地なくしゃべってる、あれはすごい。

そういうドラマを見ていた私の夫は、感に耐えぬごとく、

「あれでは西洋の男、かなんやろうなあ、会社でやられ、家へ帰ったらあの調子でやられ……」と深甚な同情を寄せていた。

しかし私にいわせれば、日本の家庭でもっと縦横に会話が交されるべきである。テレビを家族の皆がじーっと見つめて、一語も交されないまま、というような風景はせつない。テレビなどどうっちゃって、家族同士、丁々発止の会話があるほうがよい。そこで私は、ヒロインの「あかり」というハイミスに、男のくどきに対して、ああいえばこう、こういえばああいう、と口では負けない女にした。ハイミスは能弁によって身を守ることまでできる。

だから、私の小説のヒロインの名は、美しいだけではダメで、かなりやんちゃな感じが欲しいのだが、その気分を反映する名前は、なかなかむつかしい——。「あかり」はややしおらしすぎる感もないではないが、それでも私は、美人というだけの登場人物には、

「木原梢」

とか、

「雪野さへぐら」

などと、じやくじやく 嫻々とした風情の名をつけて、やんちゃとは一線を劃しているつもりである。

やんちゃハイミスとしては、ほかに『ダンスと空想』の「カオル」、『恋にあっふあっふ』の「マドカ」なんかがある。

ハイミスではなくて、男はいるけれど、自由に生きてる女には『蝶花嬉遊図』の浅野モリとか、『恋にあっふあっふ』の「アキラ」なんか、好きなもののうち。

やんちゃで、もうひと癖あるの、なんて味の女には、昔、「久根子」という名をつけたことがある。

バイオリニストの諏訪根自子さんなど、私から見ると、すばらしいお名前である。字づらもユニークで、音も幻想的である。現実の名前は何ともいえぬ存在感と香気にみちている。これから私は、さまざまな名をさがしてロマンの森をさまようことだろう。